「帯江研」だより

Vol.8
2023/7 発行

帯江鉱山研究会事務局
岡山県総社市門田213 小西伸彦方
E-メール
falbo524@gmail.com

坂本昇先生の思い出

等農（とうのう）　修（おさむ）
（ＮＰＯ法人旧堀氏庭園を守り活かす会 副理事長）

私は78歳、現在、津和野町で700年の歴史を持つ笹ケ谷（ささがたに）鉱山の研究と、その経営者であった堀家の歴史について調査研究をいたしております。あわせて堀家の建物や庭園、周囲の景観を含めた約7ヘクタールが、「旧堀氏庭園」の名義で2002（平成14）年に国の名勝に指定されましたことから、10年前から不定期ではありますが、ご入館いただきました皆様へのガイドや、町内外への堀家の研究報告会などをさせていただいております。68歳までサラリーマンをしておりまして、それから堀家の研究に入りましたので、まだまだ未熟者でございますが、マイペースで日々挑戦させていただいております。

さて４年前（2019年）の４月、坂本昇先生より津和野町教育委員会、津和野町立図書館、そして堀庭園事務所にお電話がございまして、小川熊治氏についての資料の有無についてご照会がございました。小川氏は1888（明治21）年5月に津和野の笹ケ谷鉱山から吉田鉱山に転職し、吉田鉱山が帯江鉱山と名称を変更した後、鉱長に昇任され、個人経営から坂本合資会社となった1906（明治39）年３月、帯江鉱山の理事兼支配人になった方です。帯江鉱山を退職する1911（明治44）年8月まで、23年に渡って事業の発展に尽力し、帯江鉱山を成功に導いた方でもあります。

ところが津和野町の職員は全く小川氏のことを承知しておらず、町から連絡いただいた私にも全く初耳でございました。そこで急遽、帯江鉱山の情報をネットや文献で調査いたしました。そして、倉敷市内のそれぞれの親睦団体のホームページや記述を見せていただき、倉敷市教育委員会にも小川氏の情報提供のお願いをしました。その結果、倉敷市内に「小川君熊治功績忘彰碑」が有ることを教えていただき、その碑文の写しを送付していただきました。

そんな中突然、４月24日に坂本先生がご来町され、図書館に足をお運びになりました。職員は慌てて私に連絡してまいりましたので、すぐ飛んで行き、初めて坂本先生にお目にかかりました。岡山ナンバーの車を見て、ご自身で運転して来られたことがすぐに分かりました。図書館では、小川氏が笹ケ谷鉱山を経営する堀家の大番頭・新藤吾市氏に充てた年賀状（ハガキ）と、堀家の当主・藤十郎氏へ宛てた実弟・昌造氏からの手紙の写しの提供を受けることが出来て、坂本先生は大喜びでした。

我が家の前で

さらに、私が所蔵しておりました堀家が経営した長登（ながのぼり）鉱山への業者からの納品書の原本もお見せいたしました。初日の２時間近くの情報交換はあっと言間に過ぎ去りました。次の日の日程を決めた後、津和野町内をご案内いたしました。

掘庭園長屋蔵で、左から坂本昇先生、作陽大学卒業生の佐々木美和子さん、筆者

翌日は、津和野町教育委員会にもご訪問の申し出をしておられましたので、ご案内いたしましたところ、小川氏から新藤吾市氏へのハガキの提出があり、坂本先生は大変お喜びになりました。また、堀家内の文書の提供も受けられ、さらにお喜びになりました。その後、笹ケ谷鉱山跡を中心に夕刻までご案内させていただきました。しかし、小川氏が1911（明治44）年に帯江鉱山を退職した後の消息は分からずじまいでした。

それ以後、坂本先生とはお互いの情報を共有させていただき、またご指導をいただき、『岡山県立記録資料館紀要』や高梁川流域連盟の機関誌『高梁川』、「帯江研だより」など沢山の資料と情報をご提供いただきました。坂本先生は、津和野町で手に入れられた情報に併せ、「小川君熊治功績忘彰碑」の文面をご参考にされ、数々の調査報告書の執筆に全力を捧げられたものと確信いたしております。

2021（令和３）年10月25日に坂本先生からお電話があり、長登銅山の資料を送ってほしいとのことでしたので即日発送いたしました。28日付でお礼のお手紙と贈り物を受領いたしましたので、お礼の手紙を11月初旬に差し上げましたところ、奥様より、10月31日に急逝されたとのお知らせをいただきました。あまりにも突然の話で、驚きと悲しみでどうすることも出来ませんでした。本当に悲しいです。津和野での坂本先生との２日間は、本当に思い出の深いものとなりました。ありがとうございました。

さて、坂本先生は小川氏のその後の消息調査に特段の熱意をお持ちでありました。年賀状の宛先であります新藤家への情報提供や、堀家の資料調査の協力を強く求められました。私は関係先に何度も照会し、堀家の関係資料も調査いたしましたが、時代が相当経過していることや、世代交替していることなどから、期待どおりの成果は得られませんでした。誠に残念な気持ちでありました。

半面、津和野町へお見えになった時の思い出は沢山ございます。４月25日に笹ケ谷鉱山跡へご案内する前に、コンビニでイナリずしとのり巻きのセットを購入されました。そして私の家で食事をされましたが、自分は小食だからとおっしゃり、少し召し上がり、残りは私に食べて下さいと申されましたのでいただきました。私の住む田舎をご覧になって、良い環境にお住みですねと言ってく

ださいましたし、書斎にお入りになり、堀家の資料が豊富ですねとのお褒めの言葉もいただきました。素人の郷土史家めいた細やかな活動をしている者といたしましては、歴史文化の研究に闘志を燃やしていらっしゃいます坂本先生からいただいたお言葉は、勇気百倍の感を抱いた次第であります。

鉱山跡への道中では、ずっと小川氏の消息や笹ケ谷鉱山での動務状況等について熱心にお尋ねになりましたが、この件につきましては初めてお聞きする内容でございましたので、お答えすることが出来ませんでした。

堀家として鉱山経営に起死回生を図った良好な鉱脈・七番坑道にご案内いたしましたところ、大変興味深く現場をご覧になり、入ってみたいとのお言葉でしたが、現在は、民有地となっており、坑道のみを津和野町役場が管理している状況でありますことから、これを断念されました。七番坑道は1909（明治42）年の発見から1949（昭和24）年まで、鉱員数600人で採掘していました。後日、私が２回入坑いたした折の写真を贈呈させていただきました。坑道前での坂本先生の立ち姿は、今も忘れることが出来ません。

さらに製錬所跡地や急坂の鉱石運搬道を300m以上もお歩きになり、もう道がなくなりましたよと申し上げるところまで登り詰められました。その足取りの軽さには本当に感激し、坂本先生の研究心の旺盛さとその気力には感服いたしました。

笹ケ谷鉱山のエリアは約150町歩もございますが、帰り道は林道や集落を通過しながら、堀家の菩提寺である西光寺（さいこうじ）にご案内いたしました。ここは堀家が建立したものであり、堀本家の代々当主や家族、堀分家六家の代々当主が眠る場所です。本堂、境内をご案内した後、堀家の大番頭であり、小川氏からの年賀状を受け取られた新藤吾市氏の墓所をご案内いたしました。坂本先生は興味深く、真剣に墓誌をご覧になり、深く手をあわせていらっしゃいました。坂本先生は新藤家の墓誌には「吾市」は「五一」と記載されております。

機関誌『高梁川』に著されましたとおり、坂本先生の祖父・義雄様の兄（大叔父）であり、大政治家で大経営者でもある坂本金弥様のもと、鉱山経営の最高責任者として携わっておられ、小川氏との友好を示されていた新藤家の墓前では、坂本家の末裔として格別の思いをお感じになったのではと思量いたしました。私は、引き続き調査と情報収集をしてまいりますと、強くお誓いした次第であります。

またここには、堀家十五代当主・堀藤十郎（代々襲名）氏の顕彰碑が建っており、これにも坂本先生は大変興味を示されました。瓦紋も堀家の模様であり、曹洞宗本山の永平寺へも多額な寄進をされており、堀家の影響力の大きさには驚きを隠しえません。

次は、堀家のご自宅である堀庭園を訪問いたしました。この建物は1785（天明５）年に再建されたもので、その後４回の改修がなされております。堀家の居宅兼事務所として約40人の生活の拠点となっていたようです。館内と周辺の景観を、坂本先生にしっかり見ていただき、事務所へ参りました。事務所では、私の仲間や事務職員が待ち受けており、坂本先生との歓談のひとときを過ごさせていただきました。その事務職員の中に、坂本先生が非常勤講師をされた美作大学の卒業生がおりました。直接の教え子ではなかったようですが、先生は大変感激されておりました。

笹ケ谷鉱山七番坑道の前に立つ坂本昇先生

ご当家には貴重な資料が沢山収蔵されており、堀家との関わりの深い名家の品々が数多くございます。我が国の初代総理大臣である伊藤博文氏の書も三幅ございますし、堀家第十五代当主・堀藤十郎氏の次女・秀子氏は、西郷隆盛氏の次男に嫁いでおられます。これらのご縁で、長州藩や薩摩藩などとの関わりが大きくなりました。特に、各藩の資金調達に応需されたことが、堀家のさらなる繁栄をもたらしたものと思えます。

次に、堀家第十五代藤十郎（礼造）氏が地域の慈恵病院として、当時の金１万3000円余りで、私立病院として1892（明治25）年に建設した畑迫（はたがさこ）病院をご案内いたしました。地元民は安価で診療するなど、地域医療の祖とも言える医療施設で、多くの診療科を有したこの病院は、中国・九州一円からの受診者で大盛況であったと聞いております。また、60歳代以上のこの地域の現在の住民は、大半がこの病院のお世話になっていると聞いております。津和野の片田舎の、この堀家に、島根県では初めて電気が通じたと中国電力の年史に記載されておりますことから、私費でレントゲン機器を導入されたことも頷けます。坂本先生が建物をはじめ、館内を隈無くご覧になっておられた姿が印象的でした。

夕方近くになり町中に帰り、「日本の五大稲荷」と言われております太皷谷稲成（たいこだに）神社（太鼓谷稲荷神社ではない）にご案内いたしました。初めて参詣されたとのことで、大変嬉しそうでした。多分、ご自身の健康を祈願されていたのではと、今そう感じております。そして最後に、「津和野の鯉」の発祥の地・吉永邸を訪問いたしました。殿町通りの掘割りの鯉や各町内の鯉の放流に、多大な貢献をしておられるこのお宅の訪問に満足そうでした。NHKで放映されました50年前の「新日本紀行」、そして近年何度も再放送されます同番組の、三代に渡る主演者がご当家です。

最後に嬉しいニュースです。坂本先生の津和野町訪問の最大目的は、帯江鉱山で活躍された小川熊治氏のその後の消息調査と理解をいたしております。実は一週間前（2023年６月）に、津和野町内の他地区の歴史研究会のメンバーから、保存されている古文書の中に、「小川熊治」の名前を見付けたとの報告をいただきました（飲み会の席で）。古文書の中に、「帯江鉱山から帰郷されて、津和野町に住み、77歳で亡くなった」ことが記載されているとのことでした。私は大変嬉しく思いました。まだ最終確認をしておりませんが、小川熊治氏のお孫さんは、かつて、私が金融業務に携わっておりました時の、旧日原町（にちはらちょう）の収入役・小川豊氏だということということを知り、いつも収入役室で小川収入役と歓談させていただいていたことを思い興しました。その小川収入役の実妹・岡崎節子氏は、私の習いごとのお弟子さんであったことも思い出しました。小川家のご自宅は、我が家から40分ぐらいのところにあります。現在は、曾孫さん（当家に入婿された方とのこと）が家を守っておられるとのことでしたが、不在がちですので、近い内に連絡をとり、小川家を訪問したいと考えております。このことが判明すれば、坂本先生はどれほどお喜びになられるか、早く調査してご霊前に報告しなければと思っております。

追伸

坂本昇先生との文書の交流で、私も「帯江鉱山」を知りたくなり、坂本先生からご紹介いただきました参考資料を通販や古書店で求めて、勉強中です。「帯江鉱山研究会」の諸先生にご指導いただければと願っている次第です。

あとがき

帯江鉱山研究会を設立した坂本昇氏は、坂本金弥研究のため、文字どおり東奔西走の調査を続けました。昇氏は1911（明治44）年９月20日、帯江鉱山本部のあった都窪郡中庄村（現在の倉敷市中庄）に建立された「小川君熊治功績忘彰碑」に着目し、小川熊治について調べるため2019（平成31）年４月、小川の郷里・鹿足郡津和野町を訪ね、関係資料を発見しました。「帯江研だより」vol.８では、そのとき昇氏をご案内くださった等農修氏がお寄せくださった原稿を紹介させていただきます。